

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作:ウッチャン大好きっ子

* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

1. 真和(まお)

解説

1. ”輪廻転生”・・・車輪が回転する様に止め処も無く、全ての魂は転々と様々な生き物に移り巡り、生死を繰り返す。迷いの世界を巡り、永久に滅びる事が無い。そして現世に出会った者は全て前世以前に出会っている。という考え。

~ 第34章 ~ < ”見透かす紅き瞳” >

凱歌が投げ飛ばされてから1分も経っていなかったが、その場に居た者には何時間も経ったような錯覚をしてしまう程の重圧感が室内を支配していた。

長くそして美しい紅髪をなびかせながら静かにきなこ達の方に凱歌を投げ飛ばした男が振り向いた。

その者の瞳も髪と同様に美しく深い紅色だった。しかし、その瞳に見つめられると全てを見透かされてしまうような冷たさがあった。そして、どこと無くスナイパー・王 凱歌の冷たく寂しい感じも持ち合わせている様に感じた。しかし、その瞳には人間を信じていないと告げているような強い光もあった。

きなこはその冷たく見下す様な眼差しが向けられた時、正面からその眼差しを受け止めた。そして、睨み付けた。

男はきなこを見たまま、音を立てる事無く、近づいてきた。そして、きなこの正面に立つと、きなこの顎に左手を掛け、上を向かせた。

「いい目をしている。”あの女”と同じ強い自信と信じるものがある目だ。

しかし、女としては可愛くない目だ。お前を見てると俺様から全てを奪い去った”あの女”を思い出す。」と男は低く貫禄のある声で言った。そして、きなこに背を向け離れた。

きなこは男を間近にして、『この人には何も無いのかもしれない。信じる人も、感情さえも。』と思い、感じた。

男はきなこから少し離れた所に立ち、再び室内に居る者を見渡した。

「一体ココはどこだ？まゝそんな事はどうでもいい。お前達、動かない事は正解だ。

お前達が少しでも余計な事をしていたら、痛みを感じる前に絶命する事になっていたからな。

それではお前達に問おう。お前達は俺様の敵か、それとも俺様に遣える下僕か？

さあ、答えてもらおう。」と低く貫禄のある声に、冷酷さが足された声できなこ達に問い掛けた。

その時、何かが動く音が響いた。全員がその音のする方向を見た。

~ 第35章 ~ < 殺気の龍 >

「ほう。あれだけの衝撃にも気を失わなかった様だな。さすがは”現”世界一のスナイパーだ。誉めてやる。しかし、状況が分かっていないようだな。王 凱歌君。」と男は振り向きもせず、その貫禄のある声で言った。

そこに立っていたのは凱歌だった。しかし、見るからにとても戦える状態ではなかった。

それでも構えの態勢をとっていた。

その瞬間だった、先ほどまで何の感情一つ、表に出ていなかった男から、とんでもない殺気が満ち満ちてきた。

それはその場に居た者が圧倒してしまい、下手をすると、この殺気だけで押し潰され、死んでしまいそうだった。そう、殺気が荒れ狂う龍のような形を成している様にさえ感じた。

天山と蒼凱はその凄まじい殺気に動けず、嫌な汗を掻いていた。

プロフェッサーはその殺気の龍をまとった男を絶望に満ちた表情で見ている。

きなこはその圧倒的な殺気に押し潰されそうになりながらも、凱歌を止めようと恐怖で動かない体を奮い立たせようとしていた。

『このままではホイさんが殺されてしまう！だから動いて私の体！』ときなこは強く望んだが体は動いてはくれなかった。

きなこは下唇を噛み締めた。血が滴れるほどに。自分の弱さを憎みながら……。

『本当のアサシンというものをを見せてやろう！お前では俺様をときめかすのには役不足だ！』と先ほどの冷たい視線から荒れ狂う炎の様にギラギラした冷酷な目で男は凱歌に振り向いた。

その瞬間、凱歌は走り出した。

男は飛び込んでくる凱歌の右手での攻撃を軽々と避け、右足を振り上げた。

それは見事に凱歌に当たり、再び壁に叩き付けられた。

『これはいかん。軽くやったつもりだったんだが、やはり久しぶりの体なので力加減が上手く出来なかった。』と男は蹴り上げた足をゆっくりと下ろしながらその血の通わない冷酷な声で微笑みながら言った。

しかし、すぐにその笑みが退いていった。再び凱歌が立ち上がった。それを見た瞬間、遊び感覚が消え去った。その張り詰めた空気の中で、突然”あの羅列”がこだました。

男はその羅列のする方向に振り向いた。

『ほ～う。”言霊術”か。まだ呪術士が残っているとはな。という事はそいつは今、このガキの”人形”か。』

さっきも言ったが俺様を、ときめかせるには役不足であり、その上俺様は”人形”をいたぶるような行為はしない！』と男は言い、向かって来る凱歌を、軽々と弾き飛ばした。

『くっ。こうなったらあの技を使え！凱歌！』と劉冥は言い、再び”あの羅列”を口にした。

凱歌は静かに精神を落ち付けていた。そして、あの凄まじい気を発し始めた。

『またその技か？というか、それは技というには芸がないぞ。それに体の中に長年蓄積されていた気を右手に凝縮し、それを相手にぶつけるという単純明快な気功術では、技というには初步中の初步だ！』

第一、お前にはもう先ほど同じだけの強さの気を溜めるだけの”生命力”はない。

この一発が最後になる。それ以上やれば、命を失う事になる。

しかし、俺様も嘗められてものだ。いくら”あのあまちゃん”と俺様は全くもって別人だが、

一度食らった攻撃がこの”紅き死神 禍悪主”に効くと思っているのか！！』と

男はつまらなそうに話していたが、最後には凄まじい殺気と人を人と思わない冷酷な声で言い切った。

～ 第36章 ～ < 伝説の”紅き死神 禍悪主”降臨 >

全員が男が語る名に動揺した。それは龍牙の過去の名だった。

凱歌が気を溜め終え、”禍悪主”と名乗る男に向かって走り出した。

「ホイさん～！やめて！死んじゃう！！」ときなこが恐怖で動かない体で声を張り上げた。その瞬間、凄まじい放電音が響き渡った。きなこは僅かな悲鳴を上げ、凱歌と”禍悪主”の方を見た。しかし、凱歌の攻撃は男により打ち消されていた。いや、その凄まじい気は逆に男の左手に受け止められていた。そして、”禍悪主”は凱歌の耳元で何かを囁いていた。凱歌が突然、目を見開き、振りかざしていた右腕が静かに下がり固まった。そこから静かに凱歌から”禍悪主”は離れた。その凱歌の姿に劉冥は慌ててあの羅列で指示したが全く動かなかった。「無駄だ。君の”言霊術”は俺様が解除した。意外と簡単な構造だったので容易かったよ。俺様は”人形をいたぶる”のは好きではないが”人形遊び”は好きでね～。この”人形”は俺様が貰ってやる。貴様のようなガキにはもったいない！この俺様にこそ相応しい！」と”禍悪主”は冷酷非道な声で答えた。「貴方は本当にあの龍冴さんなの！？一体ホイさんを何だと思ってるの！？ホイさんをどうする気なの？」ときなこは”禍悪主”へ恐怖を忘れ、怒鳴った。「龍冴？一体誰の事だ？もしかしてあの”お人好しのガキ”の事か。あんな屑と一緒にするな！コイツを何だと思ってるか聞いていたな。教えてやろう。”人形”であり駒だ。それ以外の何者でもない。コイツには”真の暗殺者”つまり”死神”になってもらう。俺様の手足と成り得るようにな！」と”禍悪主”は初めの時のような冷たく見据えるような眼差しで言った。きなこは怒りに任せ、”禍悪主”に向かって行こうとした。しかし、天山と蒼凱が素早くきなこを止めた。「離して！私がホイさんの目を醒ませせる！第一、ホイさんを物としてしか考えていない奴なんか！」ときなこは止める二人に怒鳴った。「きなこさんの気持ちは分かりますが、状況を考えてください…。僕だって凱歌を助けたい！でも…。」と蒼凱が震える声で言った。「だから、感情など必要ないのだ！その女のようにすぐに感情的になれば死ぬだけだ。それに対して、さすがだ。感情的にならず冷静に状況を判断しているな。それでは、君達にはこの”人形”の生贄になってもらう！手始めにそうだな…。お前からだ。見習い呪術士！対した事を知らない様だが、後々邪魔になりそうなのでな。呪術士は一人で十分だ。さあ、そやつは紅き鮮血でその身を真っ赤に染めるがいい！王 凱歌！そして真の”言霊術”を見るがいい！」と”禍悪主”は笑いながら言い終えるあの”羅列”を口にした。それは非常に短いものだったが凱歌は劉冥の時よりも俊敏に動き出した。凱歌はその色を失った瞳で劉冥を見つめ、走り出した。そして、劉冥の首を手刀で切り裂こうとした瞬間だった”禍悪主”とは違う声の羅列がこだました。凱歌の手刀は劉冥の首筋の5cm手前で止まった。「俺様の”言霊術”が止められた！？有りえない！誰だ！」と”禍悪主”が凄まじい動揺をして言った。静かにきなこ達の横を抜け、誰かが”禍悪主”の前に立った。「なぜ貴方がここに…。なぜ邪魔をする博士！」と”禍悪主”が動揺と怒りの籠もった声で言った。

～第37章～ <人類の罪>

きなこ達の前に立っていたのは、プロフェッサーだった。

二人が睨み合う。凄まじい殺気を発する”禍悪主”の突き刺さるような視線に比況を取らず

プロフェッサーの”禍悪主”を見つめていた。

「ついに目覚めてしまったようだな”禍悪主”。お前を止める事が出来るのはわしだけの様だな。」とプロフェッサーは静かに言った。

「止めるですって？俺様と本気でやり合う気ですか？博士、貴方が一番俺様の事を良く知っている筈ですよ。」と”禍悪主”は笑いながら言った。

「ああ、確かにお前のその異常な強さ、冷酷さはわしが一番よく分かっている。だからこそお前を目覚めさせる。」とプロフェッサーは真剣な表情で答えた。

「目覚めさせる？まさか、”あのお人好し”の事を言っているのか！？下らん！無駄な事だ。奴は所詮欠片。本物を止める事は出来ない！」と”禍悪主”は馬鹿にしたような声で言った。

「龍牙はお前の欠片ではない！お前の片割れであり、お前が持ち得なかった人の心、良心じゃ！」とプロフェッサーが怒りに震えながら言った。

”禍悪主”が腹を抱えながら大声で笑い出した。

「人の心だと！笑わせるな！確かに俺様には無い物だが必要のない物だ！心などという”まやかし”は弱き人間が持つものであり、心は人を弱くする！」と”禍悪主”は見下すような眼差しで答えた。

「お前はなぜそこまで人間を下等に見る？なぜそこまで人間を憎む？」とプロフェッサーは悲しそうな声で言った。

「なぜ？答えは簡単だ。どんな生き物も死に向かって生きている。そして、それは自然界の掟に従ってだ。しかし、人類は自然を欲望のままには破壊し、種を消し去った。どんな生き物も増え過ぎたら自然淘汰される。しかし、人類はそれすらできないほどに増えてしまったのだ！

人類こそ、この世から消え去るべき存在だ。だから消し去るだけだ！そして俺様にはそれを行う資格がある。それが俺様の”正義”だ！

博士、貴方も分かっているはずだ。この世界に真に必要な無いものを、俺様の存在理由を！」と”禍悪主”は今までにない恐ろしく冷酷であり、自信のようなものが満ちた声で言った。

暫しの沈黙が室内を支配していった。その間もプロフェッサーと”禍悪主”の睨み合いは続いていた。

先に沈黙を破ったのはきなこだった。

「確かに人間は自然を破壊し、様々な生き物を絶滅させたわ！でも貴方に人間を滅ぼす資格なんて無いわ！」ときなこは言った。

「何も知らず、のうのうと表の世界で生きてきた者には分かるまいな。

お前の前に立つ者がした、人間が越えてはならない境界線を越えた行為を。それが俺様が人類を裁く資格の要因だ！」と”禍悪主”は言った。しかし、きなこは見逃さなかった。一瞬だが”禍悪主”の瞳に悲しみがよぎったのを。

「確かにお前の言う事にも一理ある…。それは認めよう。しかし、人類もまた自然から生まれた自然の一部だ。それを消す事は自然を破壊する事と同じではないか？」とプロフェッサーは

なだめる様に言った。全員が”禍悪主”の言った人類の”罪”に痛感していた。

「人類が自然の一部だと？そう言う考えもあっていいだろう、だがそれでは矛盾が起きないか？

では、なぜ人類だけが必要以上に自分の一部である自然を破壊する？

人類は自然の一部などではない！人類は自然、この地球の癌と同じだ！だから取り除くのだよ。」と”禍悪主”は言い切った。全員がその説得力のある言葉に絶句してしまった。

「さあ掃除の時間だ。たとえ、博士だろうと邪魔をするなら死んでもらいます。」と”禍悪主”は言い、殺気を全員に向けた。

「やはり分かってはもらえんか…。ならばわしが命を賭けてでもお前を止める！」とプロフェッサーが”禍悪主”に向かって構えた。

「本気で言っているか！？どうしてそこまで人間を守る？自分の命が惜しくないのか？」と

”禍悪主”は動揺した声で言った。

「お前には守りたいと思うモノが無いからだ。わしはココに居る者、そしてお前を助けたい。

ただそれだけだ。」とプロフェッサーは言った。

「俺様を助ける？それは博士が退いてくれれば済む事です。ですが、それは無いようなので本気で

死んでいただきます。まさか”神の創造主達(ゴットクリエイターズ)”の一人である荒神博士と

戦えるとは。そして、子が親を超えるだけだ！さあ、博士の心臓から流れ落ちる鮮血を

飲ませてもらう！」と”禍悪主”が言いながら、プロフェッサーに体を向けた。

二人が睨み合いながらタイミングを見計らっていた。

「戦う前に、その”右手の手袋”を外せ。それはわしが龍牙の為に作った力を抑える装置なのだ。

お前とは真剣勝負がしたい。」とプロフェッサーは静かに言った。

その言葉に龍牙を知る者、全員が驚き、プロフェッサーを見た。

なぜならプロフェッサーが言っている事が嘘である事は明確であった。その嘘が何を意味しているのか全員分からなかった。

「これか？俺様にはこれにそれだけの力がある様には思えないが、まあいいだろう。

邪魔だと思っていた所だ。」と”禍悪主”が言い、右手を見た。そして右手の手袋に左手を掛けた

時だった。一瞬、ためらう様に顔をしかめ、手を止めた。しかしすぐに”右手の手袋”を取り、投げ捨てた。

その瞬間、”禍悪主”の顔色が変わっていった。そして、苦痛に顔を歪め始めた。

「くっ！貴様！一体何をした！？ううう…。この右腕は一体何なんだ！俺様の腕ではない。

どこかで見たような…。」と”禍悪主”は呟きながら左手を頭を押さえた。

苦しみ”禍悪主”を全員が驚きながら見た。

～第38章～<二人の”境界線”>

「その右手はお前と龍牙の”境界線”である人物の手だ。その手はお前を止める事が出来る。

お前を封じられる！」とプロフェッサーが言った。

「”境界線”だと！！まさか！アイツの…。」と”禍悪主”は言い終える前に苦痛で

しゃがみ込んでしまった。

その光景にきなこ達はあの時プロフェッサーが付いた嘘の正体を知った。プロフェッサーはこうなる事を予期していた。

「そうだ。この右手はお前が唯一心を許した人間。その名は…。青水 きなこだ！」とプロフェッサーは静かに言った。

プロフェッサーがその名が響いた瞬間、”禍悪主”が悲鳴を上げた。まるで自分が死ぬような悲鳴を。

「青水 きなこの事はお前も知っているはずだ。青水はお前を守って死んだんだ。そしてお前に失った右手を与えた。」とプロフェッサーは静かに言った。

「死んだ…。あの女が！？くっ。あの女め！どこまで俺様を縛れば気が済むんだ！」と”禍悪主”は言い終えると口から大量の血を吐いた。

禍悪主は左手で口を押さえ、咽込んだ。その手からは血が流れ落ちた。

「龍牙！目を醒ませ！今なら出られるはずだ！」とプロフェッサーが怒鳴った。

そして、きなこ達も龍牙を呼び始めた。

「ふざけるな！この俺様が自分の体に拒否されるなんて有り得ない！こうなったら、俺様が消えても殺戮は行なってやる！」と”禍悪主”が怒鳴ると”あの羅列”を口にした。

「まさか！やめろ！”禍悪主”とプロフェッサーが慌てて凱歌を見ると凱歌は近くに居た劉冥に攻撃を加えようとしていた。プロフェッサーが慌てて羅列を口にしたが凱歌は止まらなかった。

「無駄だ。博士では止められない。あの羅列は俺様にしか分からない様に作った最終羅列だ！凱歌は死ぬまで目に入った全ての人間を殺し続ける。」と禍悪主は血を吐きながら言った。

「龍牙！目を醒ませ！取り返しのつかない事になる！天山、例の作戦を！」とプロフェッサーは急いで凱歌の方に向かいながら怒鳴った。

その時だった凱歌の視線がきなこに向いた。凱歌はきなこに向かって走り出した。

凱歌の攻撃から、きなこを守ろうとした蒼凱は、凱歌の人間離れしたスピードと攻撃力に薙ぎ倒されてしまった。

きなこを守る者は誰も居なかった。そして、凱歌の手刀がきなこを切り裂こうとした瞬間、
「禍悪主！」と女性の声が響いた。

その女性の声が響いてすぐに、言霊が響き渡った。その声は冷酷な”禍悪主”ではなく血の通った優しい声だった。凱歌の動きが止まり、その言霊のした方を、きなこが見ると、そこには”禍悪主”が凱歌を指差しながら肩肘を突いて立っていた。そしてゆっくりと凱歌に向かって歩き出した。口から血が滴り落ちながら…。

”禍悪主”はきなこを優しく見つめると凱歌の横に立ち、何かを囁いた。その瞬間、凱歌の瞳に”色”が戻り始めた。そして、ゆっくりと”禍悪主”は凱歌から離れていた。

「ホイさん？大丈夫？」ときなこが声を掛けると、「きなこさん？」といつもの優しいホイさんの声が聞こえた。

「ホイさ～ん！」ときなこは声を上げ、凱歌に抱きついた。凱歌も突然の事に驚いたが、抱き付かれた衝撃で体中が痛み小さく悲鳴を上げた。

「良かった…。間に合って…。ごめんね…。凱歌、きなこさん。」と弱々しい声が聞こえた。

きなこと凱歌が見るとそこにはゆっくりと崩れ込む”禍悪主”が居た。その時、また違う声が聞こえた。「おのれ…。なぜあの女の声が聞こえたんだ。そしてどこまでも邪魔をする奴だ…。

いいか、俺様は再び心の底に消えるが必ずこの体を取り戻し、お前達の前に現れる！その時こそお前達を消し去ってやる！」と不気味な事を言い残し、”禍悪主”は消えた。そして、龍牙の体の周囲は口から流れ出た血で満たされていた。全員が呆然と立ち尽くしてしまった。

～第39章～<”禍悪主”から”龍牙”へ>

静かな時間が流れていく内に、龍牙の姿が変わっていた。

徐々に髪の色が元の銀髪に戻り始めた。そんな時、龍牙は咽込み、閉じていたまぶたを開いた。

龍牙はゆっくりとうつ伏せから仰向けに体の向きを変えた。そして荒々しく呼吸をした。

「俺は一体…。凱歌、きなこさん。良かった、無事で…。」と龍牙は血で言葉が詰りながらも優しく言った。

その瞬間、凱歌ときなこそしてプロフェッサーは元の龍牙に戻った事を確信した。

「龍牙！」とプロフェッサーは龍牙に向かって走り出した。そんな中で蒼凱が意識を取り戻し天山に支えられながら近づいてきた。

プロフェッサーが龍冑を抱きかかえると、龍冑は激しく血を吐き出した。
「天山！すぐに吸引機を持ってきてくれ！早く！」とプロフェッサーは悲痛な声で言った。
すぐに天山は「分かった。」と慌てて部屋を出ていった。
そして、天山が吸引機をプロフェッサーのそばに持ってきた。
プロフェッサーは手早く吸引チューブを龍冑の口の中に入れた。そして、吸引機のタンクに龍冑の血がどんどん溜まっていった。
「プロフェッサー……。俺……。」と龍冑が喋ろうとした時、「いいから喋るな。気管に血が入ってしまう！」とプロフェッサーが怒鳴った。
その光景をじっと凱歌ときなこが静かに後ろで見ている。
そんな時だった。突然龍冑が口の中に入っていたチューブを抜き、立ちあがった。
プロフェッサー達は突然の事に動揺し呆然としているが、その龍冑の感じからいつもの龍冑では無い事を感じ取った。そしてその瞳には先ほどの凱歌の様に”色”を失っていた。
まるでマリオネットの様だった。
全員が緊張して様子を見てみると、龍冑は劉冥の前で立ち止まった。そして、劉冥の肩を両手で押さえると口を大きく開け、首筋に噛み付いた。
劉冥は突然の事であり、あまりの痛みから悲鳴を上げ、痙攣し始めた。
慌てて蒼凱達が龍冑を止めに走り出そうとした時だった龍冑は噛み付くのをやめ、劉冥から手を離れた。
劉冥は力なく崩れた。その顔は血の気が引いた真っ青な顔だった。
龍冑がきなこ達の方に振り返るとその口元は血で汚れた。まるで血をすすり飲んだかの様だった。そのまま、龍冑は立ち尽くしていた。
蒼凱が近づき、恐る恐る龍冑を呼ぶと目を見開き、「えっ！？」と驚いた様に蒼凱を見た。その目には”色”が戻っていた。
「俺、一体何してたんだ？何か口の中が変だ。他人の血を舐めたみたいなそんな感じが……。」と龍冑はさっきした事を全く覚えていない様だった。
「龍冑さん。さっき自分がしていた事を覚えていないんですか！？」と蒼凱が驚いて聞いた。
「さっき俺がした事？」と龍冑は何も思い出せずに考えこんでしまった。
そんな時、劉冥がうめき声を上げた。それに龍冑は気付き、振り返り自分のした事を理解した様だった。
プロフェッサーが慌てて劉冥に血液型を聞き、輸血の準備を天山にさせた。しかし、プロフェッサーは今から輸血しても間に合わない可能性がある事に気が付いていた。
なぜなら龍冑が行なったのは、自分が失ってしまった大量の血液を劉冥の血を吸血する事で補ったのである。つまり、通常普通の人間では大量出血によるショック死をしている量の血を流した龍冑が補う血の量は劉冥の致死量である。それだけの量を失った劉冥を助けるには時間が無さ過ぎるのである。
プロフェッサーがその事実に絶望している時だった龍冑が素早く置いてあった注射器を手に取り、自分の右胸辺り(大体肝臓辺り)に刺した。そして、”透明な液体”を取り出した。
「まさか！お前！」とプロフェッサーが動揺していると龍冑がプロフェッサーを見た。
「理不尽な事を言うが、俺は誰にも死んで欲しくない。ましてや自分のせいで死ぬ人間はもう一人も見たくない！だから俺は出来る限りの事をする！もうこれしかないんだ。自分に与えられて唯一の”特権”を使う！」と龍冑は言い、劉冥の右腕にチューブを付け注射をする準備をした。

「お前は俺のせいでこんな事になってしまった。お前のお陰で俺は元気になった。次は俺がお前を元気にする。少しの間、体が軋むかもしれないが、がまんしてくれ。」と龍牙が優しく言うと、静かに注射器を劉冥の腕に”透明な液体”の量を確認しながら注射した。

注射を終えるとすぐに龍牙とプロフェッサーは劉冥の体を抑えた。すぐに劉冥の体に変化が起きた。顔色が元に戻り始めた。しかし、それだけでなく劉冥の瞳は”禍悪主”同様に”紅眼”になり始めた。そして奇声を上げながら暴れ出した。

二人は必死に抑えていた。その力は異常と言っていいほど強かった。抑えていたプロフェッサーが抑えきれずに飛ばされてしまった。

龍牙は「耐えるんだ！これを越えれば元に戻る！」と言い抑え続けた。龍牙は痛みから顔を歪めた。そして、劉冥が段々静かになっていった。

龍牙は劉冥が落ち付いたのを確認してから抑えるのをやめ、劉冥の隣に荒々しく肩で息をしながら寝転んでしまった。

～第40章～ <過去、現在、未来>

「プロフェッサー、大丈夫か？もうだめだ。いくら俺でも今回は体が壊れるかと思った…。でも、凱歌の技を食らってからプロフェッサーに抱きかかえられるまでの事がはっきりしないんだよ…。でも、俺が大変な事をしてしまったのは分かるんだ…。」

その時の俺は龍牙じゃなかった…。あれは…。忌まわしき過去”禍悪主”だった…。」と龍牙は倒れこんだまま、悲しげに言った。

「龍牙…。確かにあれはお前ではなかった。そう、”紅き死神 禍悪主”だった…。でも、今は”生と死の使徒 黒帝龍牙”じゃろう？」とプロフェッサーは立ちあがり白衣の汚れを払いながら答えた。「ああ…。あの時俺は小さく暗い部屋の中で”自分であって自分でない体”がする事をただ感じるだけだったような気がする…。止めたいと思っても、その小さく暗い部屋にいる自分はずっと座りこんだまま動かないんだ。ただ、今表に出ている奴を恐れていたのかも知れない…。」と龍牙は途中で言葉を噛み殺していた。

「そのせいで…。俺は凱歌を、きなこさんを、そして大切な仲間を殺そうとした！どうしても俺はアイツからは逃れられないんだよ！」と龍牙は握り締め血が滲んだ左拳を床に叩き付けた。その目には自分の無力さ、悔しさから涙が流れていた。

支えるきなこ、支えられる凱歌の二人はそれぞれに龍牙の無力さ、悔しさが分かるような気がした…。静かに時が流れた…。

そんな中、天山が静かに龍牙の隣に背を向けて座った。呼吸を整える様に深呼吸し、口を開いた。「ねえ、どうしてそんなに自分を責めるの？貴方はいつもそうだったわね。私が無理矢理付いて行ったのに、私が怪我しそうになったら、『俺様のせいだ』って言ってたわね…。」

貴方はいつも周りの事を考え、自分を犠牲にする事を惜しまなかった。でも、隣に居た者として、仲間としては逆に辛いよ…。私達は貴方の力にはなれないのかと、悲しくなってしまうの。だから、少しは私達に心配掛けたら？心配し合い、支え合うのが仲間でしょ？少しは信頼してよ。」と天山は静かに青水の声で言った。しかし、その声には本当に青水 きなこではないかと思うほど、気持ちが籠もっていた。

「前にも言ったが、俺にとってきなこは一人だけだ。いくら同じ格好をしようと、同じ声をして喋り方を真似をしてもきなこじゃない…。でも、嬉しいよ。誰にも言っていなかったが、

お前が言った『心配し合い、支え合うのが仲間』というのは、ボスの前に行く前にきなこが俺に言ったんだよ…。最後の忠告だ…。まだ治ってなかったんだな。俺…。』と龍冴は僅かに微笑んだ。そして静かに起き上がり、凱歌ときなこの前に立った。

「凱歌。きなこさん。済まなかった。俺がもっとしっかりと自分を持っていなかったせいで危険な目に、そして取り返しのつかない事になりそうになった。本当に申し訳なかった。いくら謝ってもどうにもならない事かもしれない。そしてこれからもいつあんな事を仕出かすか分からない。でも、俺は君達に幸せに自由になって欲しいと本気で考えている。こんな俺だがこれからも信頼してくれるか？」と龍冴は深々と頭を下げ謝罪してから、二人を見つめ問い掛けた。

二人は顔を見合わせると一呼吸置いてからしっかりとした声できなこが言った。

「確かにあんな目にはもう合いたくないけど、こんなに強い人に心配されて、仲間になれるなんて嬉しいです。これからもよろしくお願ひします。」ときなこは優しく言った。その隣で凱歌が痛みで顔を歪めていたが、その時だけは微笑んでいた。

これにより二人と龍冴達の信頼、結束が確認された。

～第42章～ <妹と道>

そんな信頼が確認されている中、劉冥が目を覚ました。

「良かった。君も目を覚ましたようだな。しかし、君は凱歌ときなこさんとは違って、色々聞きたい事が沢山あるから楽しみにしているといい。」と元の調子で天山が劉冥に言った。

劉冥はその言葉に一瞬ドキッとしたがすぐに口を開いた。

「あんなのを見た後で抵抗するほど俺だって馬鹿じゃないし、俺もアンタ達みたいなの”本当の仲間”が欲しいよ…。でも俺には守る人が居る。唯一の肉親である妹が…。」と劉冥は今までのような反動的で冷淡な声ではなく、普通の妹思いの兄の声だった。

そんな天山と劉冥の会話にきなこが入ってきた。

「貴方、本当は優しいお兄さんだったですね。それで妹さんの名前は何て言うの？」ときなこは優しく訊いた。

「さっきは済まなかった。色々申し訳なかった。それに妹の事も、酷い事をズケズケとやってしまって済まなかった。本当に申し訳ない。」と龍冴は劉冥に頭を下げた。

「別にいいんだ。凱歌済まなかった。俺も酷い態度を取っていたし、今冷静に考えれば龍冴…さんが言う事が正しい。」と劉冥は謝罪した。

「いえ、もういいですよ。」と凱歌が優しく言った。しかし、すぐに苦痛で顔を歪めた。

それに気づき、プロフェッサーと龍冴が応急手当てを始めた。

「そう言えば妹の名前だったな…。妹は真和だ。ここ、5、6年逢っていないんだ…。」と劉冥は悲しげに言った。

その時、凱歌を診断していた龍冴が「”マオ”！？5、6年前から逢ってないだっ！？」と突然声を上げ劉冥を見た。

その突然の声全員ビックリしてしまった。龍冴は慌てて「すまん。」と謝った。

「龍冴さん、妹の事知ってるんですか！？」と劉冥は訊いた。

「えっ…。いや別人かもしれないんだが、確かに”マオ”という名の女性を知っている。あと、俺の事は呼び捨てでいいぞ…。その”マオ”という女性について、知りたいか？」と龍冴は全員に訪ねた。

その場に居た全員が「知りたい。」と言った。

そして、劉冥はしっかりと頷きながら「妹かもしれない…。少しでも可能性があるなら教えてください。」と言った。龍冴は一息置いてから思い出す様に少し上を見ながら口を開いた。

「俺が初めて逢ったのは確か6年近く前の事だ。彼女は1211の職員だった。

その時俺は、ある情報屋を追っていた。その護衛に付いていたのが”マオ”という女性だった。彼女は情報屋を逃がすために俺に一人向かってきた。それに対して俺は女性と思って手を抜いてしまったんだ。それがまずかった…。

彼女はかなりの武術の使い手だったんだ。そのため、油断から一方的に押されてしまい、その時は情報屋に見事に逃げられてしまったんだ。そして、徐々に俺も本気になってきてしまった。

でも結局、その女性も逃がしてしまったんだがな…。その時に名前を聞いた。

それから少ししてその追っていた情報屋が捕まった。しかし、”マオ”という女性は捕まらなかった。

”マオ”という女性ははっきり言ってそれまで逢った1211の職員とは違った。

そうだな…。”武士道”というか正々堂々と戦いを挑んでくる奴だった。

ただの職員にしておくのが惜しいとさえ思えた。もちろん女性にしておくのさえ惜しいくらいだった。それほど真っ直ぐだった。

情報屋が捕まり、しばらくしてから別の奴を追っている時に再び”マオ”に逢った。

その時は職員ではなく、逃亡者だった…。

彼女は情報屋が捕まってから、しばらくして1211から逃げ出したらしい。追っ手に見つかりそうになっていた時に逢ったんだ。そして、俺が彼女を助けようとした時だった、閃光が俺の横を抜けていった。スナイパーがそばに居たんだ。そして、坂の上に居たのだが、脇腹を撃たれ坂を転がり落ちて行ってしまった…。

すぐに助けに行ったが、落ちる際に頭を強打して、すぐに緊急手術をしたのだが、脳に損傷があったらしく、今も眠り続けている…。

これが俺の知っている”マオ”という女性の情報だ。身体的特徴としてはどちらか忘れたが片目の瞳の色がやや薄い事ぐらいかな…。」と龍冴は寂しげに答えた。

「片目の瞳が薄い…。真和。本当に俺の妹かもしれない…。」

俺の妹は病気のせいで片目に異常があるんだ。色が薄いのもその一つなんだ。」と劉冥は言った。

～第43章～ <組織の印>

「はぁ～。やっぱり”輪廻転生”というものはあるのかな。プロフェッサーの口癖通り、

『時の流れとは残酷だが、運命もまた残酷だ』。

一応何だが、念の為に焼印を見せてもらえるか？劉冥。」と龍冴は言った。

「えっ！焼印ですか。いいですけど。それが龍冴がいう”マオ”が俺の妹であるかを確認する事に関係があるんですか？」と劉冥は疑問に思いながら上着を脱ぎ始めた。

その劉冥の体は傷だらけだった。切り傷、銃痕が沢山あった。そしてその背中に随分古い焼印があった。

「関係はある。これまでに判った事だが、1211には4種類の印があり、4種類の組織での位置付けがあるようなんだ。

説明すると、一つ目が一般的な組織に入るとすぐに付けられる”焼印”だ。

二つ目は”人質印”と呼んでいるが、一つ目と同じ様に焼印を押すのだがその印が少し違う。

その理由は、無理矢理働かせている者を表す印だ。つまり人質などを取る事で働く道具の印だ。

三つ目は特別な薬品で付けられた”隠し印”だ。

これは焼印とは違い、刺青に近い。そして、特別な薬品を掛けない限り、目に見えない物だ。

つまりこれは内通者、スパイに与えられる印だ。

四つ目はこれは不確定な部分があるのだが、ボスなど上層部の人間は体のどこかに美しい”刺青”を施しているようだ。

この四種類、確認されている。

俺が言いたいのは、恐らく君は二つ目に上げた”人質印”を与えられていると思う。そしてその印は対になっている。その人質になっている者と。つまりそれを”マオ”と同じ印を君がしていれば彼女は君の妹になる…。そして、組織は君を道具と見ていた事になる…。」と龍牙は言った。

龍牙が静かに劉冥の背中に近づいて行った。そんな中できなこはそっと凱歌に言った。

「ホイさんにもあるの？焼印…。」ときなこは心配そうに訊いた。

凱歌はきなこの問いかけに俯いたまま答えなかった。その表情は何かある様だった…。

きなこはそれ以上訊くのをやめた。

その時、凱歌は龍牙が言った四つの印が示す意味を考えていた。自分の体にある印を。

そんなやり取りに気付きながら龍牙が劉冥の焼印を確認していた。そして、静かに劉冥から離れた龍牙は口を開いた。

「今確認したが、やはり”人質印”だった…。あとは”マオ”の方の焼印を確認してくるだけだ。」と龍牙が言うと劉冥が慌てて言った。

「近くに居るんですか！？その”マオ”という女性は！？」と劉冥は言った。

「ああ、”マオ”はこの施設の中に居る。でも、確認が取れるまでは逢わない方がいいと思う。

そう言えば凱歌。俺、お前の印を手術やら何やらで調べてなかったんで見ていないんだが、お前も焼印なのか？」と龍牙は言った。

「えっ！龍牙さん、見てないんですか？」ときなこが言った。龍牙は「ああ。」と答えた。

凱歌はうつむいていた顔を上げ、立ち上がった。

何かとても強い決心をしたような表情だった。しかし、それは知られたくない事を告げなければならぬような辛さと悲しみをも秘めている様だった…。

- 続く